

初期日仏交流における私信と人的ネットワーク

——徳川昭武宛のフランス語書簡を中心に——

寺本 敬子

はじめに

日本とフランスの交流の起点となる一八五八年の日仏修好通商条約の締結後、江戸幕府は、フランスへ遣欧使節を計四回派遣した。最後の遣欧使節は、將軍徳川慶喜の弟、徳川昭武（一八五三―一九一〇）を代表とする一八六七年（慶応三年）の使節であった。

その目的は、第一に將軍名代として昭武を一八六七年にフランスで開催されるパリ万国博覧会に参列させること、第二にヨーロッパの条約締結国を巡歴させること、そして第三に、昭武にフランス留学の機会を与えることにあった。実際、昭武は、パリ万博の各種行事に参列して、各国の王族や政府首脳と交際し、その後ヨーロッパ諸国の巡歴を終えると、パリに邸宅を構え、留学生生活

を開始した。しかし、こうしてパリでの留学生生活が本格化した矢先、翌一八六八年初めに大政奉還の知らせが届き、さらに新政府からの帰国命令を受け、昭武は日本への帰国を余儀なくされた。

こうして一八六七年の遣欧使節が目的としたフランス留学は頓挫する結果となった。とはいえ、パリで学んだ知識や経験は、渋沢栄一（一八四〇―一九三二）をはじめとする随行者たちによって、その後の近代日本の形成にいかされていくこととなる。一八六七年の幕府使節は、江戸から明治をつなぐ日仏交流の機縁となったといえるであろう。とりわけ將軍名代の役目を果たした徳川昭武は、派遣時に一三歳であったことから、「少年使節」として初期日仏交流を象徴する人物に位置づけられてきた。しかしその一方で、フランスから帰国した昭武が政治の表舞台に立つことがなかったために、明治期にいかなる経歴をたどったのか、また昭武

とフランスとの接点はそのまま消えてしまったのか、それとも何らかの方法で継続されたのか、こうした点については先行研究でほとんど取り上げられてこなかった。¹⁾

そこで注目したいのが、松戸徳川家に所蔵される徳川昭武宛の「外国人差し出し」の書簡である。²⁾これらの書簡は全てフランス語で書かれ、合計でおよそ一五〇通を確認することができる。また、手紙の日付を見ると、一八八〇年代に送られたものが多い。昭武とフランスの接点は、一八六七年の幕府使節の経験に限定されたものではなく、その後も継続的に保持されていたのである。

昭武宛にこれらの手紙を送った「差し出し人」はいかなる人物であったのか。まず、書簡の分量として最も多いのは、全一〇五通の書簡を送ったフランス陸軍の軍人レオポルド・ヴィレット (Léopold Villette, 1822-1907) である。次に多いのは、明治政府の招聘で第二次フランス軍事顧問団の団長として来日したシャルル・アントワヌ・マルクリ (Charles Antoine Marquerie, 1824-1894) である (全一七通)。また、同じく明治政府の招聘で来日した法学者ギュスターヴ・エミール・ボワソナード・ド・フォンタラビー (Gustave Emile Boissonade de Fontarabie, 1825-1910) の書簡三通、その妻ジュリー・アンリエット (Julie Henriette Boissonade de Fontarabie, 1826-1906) の書簡一〇通、娘ルイス・

アンリエット (Louise Henriette Boissonade de Fontarabie, 1850-1935) の書簡一通である。この他に、日本学者として高名なフィリップ・フランツ・バルタザール・フォン・シーボルト (Philipp Franz Balthasar von Siebold, 1796-1866) の四男で、外交官を務めたハインリッヒ・フォン・シーボルト (Heinrich von Siebold, 1862-1908) の書簡八通も確認できる。

以上のように昭武の文通相手を見ていくと、彼らはみな軍事、法学、外交という、主として初期日仏交流のかなめとなった分野で日本の近代化に役割を果たした人々であった。³⁾そこで本稿では、上記の「外国人差し出し」の書簡に焦点を当て、明治以降の昭武とフランスの接点はいかなるものであったのかを明らかにしていくこととしたい。これらの分析を通じ、明治期における日仏の人的ネットワークの展開が概観されるだけでなく、いわゆる「公的」な歴史資料からは浮かびあがらない、日仏交流の社会史としての側面に光があてられるだろう。⁴⁾第一章では、徳川昭武とフランスとの接点を中心に、それぞれの文通相手といかなる経緯で出会ったのかを明らかにする。第二章では、文通相手の経歴と、それぞれの書簡の概要を述べる。

1 徳川昭武とフランス

本章ではまず、徳川昭武の経歴をたどりながら、特にフランスとの接点に焦点を当て、それぞれの文通相手との出会いの経緯を見ていくこととしたい。⁽⁵⁾

(1) 一八六七年パリ万博と第一次フランス留学

徳川昭武は、一八五三年一〇月二六日、水戸藩主徳川斉昭（一八〇〇〜一八六〇）の一八男として生まれた。最後の將軍徳川慶喜（一八三七〜一九一三）は一六歳年上の異母兄にあたる。一八六七年一月三日、昭武はパリ万博への派遣を命じられるとともに、御三卿のひとつ清水徳川家を継承した。こうして昭武は「將軍名代」という立場で、パリ万博に参列することとなる。また慶喜は、このとき昭武に対して「博覧会展観後、条約締結国へ巡歴して各国との友好を深めること、各国巡歴後はフランスにおいて三年から五年、さらに長期にわたって留学すること」を命じた。慶喜が昭武に携帯させたフランス皇帝ナポレオン三世宛の国書においても、「我が国がフランスおよびその高潔なる君主へいなく友情と感謝の念を表するため、この万博の機会に我が弟の徳川民部大輔（徳

川昭武）を私の名代として委ねました」と、フランスへの友好を表明するために弟の昭武を派遣した旨が明示されている。さらに続けて「私の意向は、皇帝の庇護のもと、「昭武が」フランスにとどまり学識を身につけることである」として、皇帝による昭武の庇護を要請した。⁽⁶⁾ 以上のように慶喜は、昭武を將軍名代として派遣することによって、フランスとの親交を深め、さらにフランス留学を通して昭武に近代知識を習得させることを重視していた。

なお、この幕府使節には、全權使節の向山一履（一八二六〜一八九七、勘定奉行格外国奉行、後の漢詩人）を筆頭に、山高信離（一八四二〜一九〇七、昭武傳役、作事奉行格小姓頭取、後の帝



写真1 マルセイユでの徳川昭武一行
(1867年、松戸市戸定歴史館所蔵)

国博物館長)、田辺太一(一八三二―一九一五、外国奉行支配組頭、後の外務省大書記官)、杉浦譲(一八三五―一八七七、外国奉行支配調役、後の内務省地理局長)、洪沢栄一(勘定格陸軍附調役、後の大蔵大丞)、高松凌雲(一八三七―一九一六、医師)など、明治期の各界で活躍する人物が随行したことも特筆すべき点であろう。そのうち、日仏関係については、とりわけ洪沢栄一が、一九〇二年にフランスを再訪し、アルベール・カーン(Albert Kahn, 1860-1940)などフランスの実業家たちと交際したこと、また駐日フランス大使のポール・クローデル(Paul Louis Charles Claudel, 1868-1955)とともに一九二四年の日仏会館の設立に尽力し、その初代理事長に就任するなど、日仏交流の発展に寄与したことが知られている。^⑦昭武もまた、日仏関係を含め、洪沢との関わりを継続的に保持していくこととなる。

一八六七年の遣欧使節にはフランス長崎領事のレオン・デュリー(Léon Dury, 1822-1891)と、イギリス公使館付通訳官アレクサンダー・ゲオルク・グスタフ・フォン・シーボルト(Alexander Georg Gustav von Siebold, 1846-1911)が同行した。アレクサンダーは、フィリップ・フランツ・フォン・シーボルトの長男で、昭武の後年の文通相手となるハインリッヒの兄にあたる。アレクサンダーは、一八五九年に一二歳の若さで父の再来日

に同行し、日本語に熟達して一八六一年からイギリス公使館の通訳官に任命されていた。一八六六年末に、アレクサンダーは、父の死去にともない、ヴェルツブルク(バイエルン)に帰国予定であったところ、日本語とその他の言語に熟達していたことから、幕府の求めに応じて、使節に同行して帰国することとなった。^⑧昭武とアレクサンダーは、これ以降も交際関係を継続することとなる。

幕府使節は、一八六七年二月一日に横浜を出発し、パリに到着したのは、四月一〇日のことであった。昭武が初めてチュイリー宮でナポレオン三世に謁見したのは、パリに到着して間もない四月二八日である。昭武の日記によると、この謁見の機会に、前述の將軍慶喜の国書を皇帝に献上している。^⑨またこれ以降、昭武は、皇后ウジェニーと皇太子からも招待を受けるなど、皇帝一家と親しく交際を重ねていくこととなる。

昭武のフランス留学については、まずフランス人の教育係の選考から準備が始められた。六月七日に全権使節の向山一履は、フランス外務省宛に昭武の教育係の選考を要請している。その後、陸軍大臣ニール(Adolphe Niel, 1802-1869)の推薦のもと、当時陸軍中佐であったレオポルド・ヴィレットが教育係に任じられた。ヴィレットは妻と子供たちとともに、パリ(一六区)のペルグレー

ズ通りに構えた昭武の邸宅に移り住み、一八六七年八月一日から一八六八年一〇月二四日まで、昭武の教育係の任務にあたった。この出会いが、生涯続く二人の親交の原点となった。

ただしこの留学生活は、本稿の冒頭で述べたように、短期間で終了することになる。一八六八年一月二七日には昭武のもとに大政奉還の知らせ、七月四日には新政府からの帰国命令書が届いた。⑩
こうして翌日の五日に昭武は留学を中断して帰国を決断する。それから出航までの間、昭武は、ヴィレットとともにフランス国内を旅行し、旅行の初日からフランス語で日記を付けている。⑪この日記には、昭武一行が、パリから南仏ビアリッツへ赴き、ナポレオン三世の離宮で「皇帝、皇后、皇太子に深い感謝の辞を述べた」ことも記されている。⑫一八六八年一〇月一九日、マルセイユ出航日に、昭武は「ヴィレット中佐に心からのお礼とお別れの言葉を述べ」、帰国の途について。⑬

(2) 第二次フランス留学（一八七六年～一八八一年）

帰国後、病死した兄慶篤（一八三二～一八六八）の跡を継いで、昭武は一八六九年一月に水戸第一代藩主に就任した。その後一八六九年の版籍奉還によって政府から水戸藩知事に任命されるものの、一八七一年の廃藩置県によって知事を免じられた。以降、

昭武は水戸徳川家の当主というだけの身分となる。ただし、一八七四年九月二五日付で陸軍少尉となり、陸軍兵学寮戸山学校付を務めた。ここで、マルクリの後任として第二次フランス軍事顧問団の団長を務めたミュニエ中佐（Charles Claude Munier, 1836-1891）をはじめ、来日したフランス将校たちと交際する機会をもったようである。⑭

一八七六年二月二三日、昭武はアメリカで開催されるフィラデルフィア万博の御用掛に任じられ、横浜から出帆した。⑮これによって約一年半におよぶ昭武の戸山学校勤務は終わることになる。



写真2 第2次留学時の徳川昭武
（1876年、個人所蔵）

昭武は、万博の閉会（同年一月）までフィラデルフィアに滞在した。その後、一月一三日にフランス渡航の願書を提出し、二月二日にパリに到着した。一八六七年のときは、將軍名代として公的な立場での渡仏であったが、今回は一人としての渡仏であった。昭武はパリに到着して間もなくオルレアンを訪ね、約一〇年ぶりにヴィレットと再会した。またヴィレットの世話でパリのエコール・モンジュへの入学手続きをとり、同校に一八七八年から一八八〇年七月まで一年半在学して幾何学等を勉強した。⁽¹⁶⁾

なお、昭武の第二次留学が開始されて約一年後、一八七九年三月に甥の徳川篤敬（二八五―一八九八）がフランスに留学した。同年の夏に、昭武は、この篤敬とともに、ドイツをはじめ中央ヨーロッパを旅行している。その間、ベルリン訪問時に、二人を案内したのは、アレクサンダー・フォン・シーボルトであった。このとき昭武は、アレクサンダーとその家族に会い、ドイツ滞在を楽しんだようである。⁽¹⁷⁾

以上の他、第二次留学については、第一次留学に比べると資料が不足し、その詳細について分からない点が多い。昭武は、第二次留学時も日記を残しているものの、その内容は簡素で、後年になるとその記録は数行にしか満たない。とはいえ、この日記には、前述のヴィレットに加え、昭武がパリで関わった日本人の名前が

挙げられている。⁽¹⁸⁾ まずパリの日本公使館の初代公使を務めた鮫島尚信（一八四四―一八八〇）をはじめ、中野健明（一八四四―一八九八）、前田正名（二八五―一九二二）といった日本公使館の職員の名が記されている。また、昭武と同様にフランスに留学した前述の徳川篤敬、昭武の弟の松平喜徳（二八五五―一八九二）、ロンドンに留学した徳川家達（一八六三―一九四〇）など、徳川家からの留学生の名も挙げられている。他にも、当時のフランスでの日本人留学生の総代を務めた入江文郎（二八三四―一八七八）、将来首相に就任し、日仏の政治・外交に役割を果たすこととなる西園寺公望（二八四九―一九四〇）とも交際していたようである。一八七八年にはパリ万博の日本副総裁として来仏した松方正義（二八三五―一九二四）についても触れられている。昭武は、これらの日本人たちと交友関係を築きながら、留学生生活を送っていたのである。

一方、昭武の日記には記録されていないが、本稿が対象とする昭武宛のフランス語書簡から、第二次留学時に、フランス軍事顧問団の団長を務めたアントワーヌ・シャルル・マルクリ、法学者ボワソナードの妻アンリエットとその子供たちとも、昭武は親しくつきあっていたことが判明する。この点については、次の章で後述することとしたい。

一八八一年五月、昭武はマルセイユ港を起航し、六月に日本に

帰国した。こうして約四年半の長期におよぶ第二次留学は幕を閉じ、これが昭武にとって最後のフランス滞在となった。なお、昭武は帰国して間もなく一八八一年二月五日に麁香間伺候（明治天皇の諮問機関）に任じられた。また一八八三年五月に甥の徳川篤敬に水戸徳川家の家督を譲って隠居した。

さて、日本に帰国した昭武はどのようにフランスとの接点を持したのか。そのネットワークの媒介となったのが「書簡」である。昭武宛のフランス語書簡を通じて、明治期の日仏の人的ネットワークを次に見ていくこととしよう。

2 徳川昭武宛のフランス語書簡の概要

本章では、昭武宛に手紙を送ったレオポルド・ヴィレット、シャルル・アントワヌ・マルクリ、ボワソナード家、ハインリッヒ・フォン・シーボルトについて、それぞれの経歴と、昭武との接点を明らかにし、書簡の概要を見ていくこととしよう。

（1）レオポルド・ヴィレット

ヴィレットの経歴、昭武との接点

レオポルド・ヴィレットは、一八二二年二月二三日に、フラン

ス北部にあるエヌ県のムシー・シュル・エヌ(Mousy-sur-Aisne)市で生まれた。⁽¹⁹⁾ その父親は直接税徴税官であり、エヌ県ランで領主権を保有する家系であった。⁽²⁰⁾ ヴィレットは軍人としての道を歩み、サン・シール士官学校、さらに成績優秀な高等軍人のみが入学を許される参謀学校を卒業し、少尉（一八四三年）、中尉（一八四六年）、大尉（一八四八年）と順調に昇進を遂げた。⁽²¹⁾

ヴィレットはその後一八五九年には騎兵大隊長、一八六六年には中佐に昇進した。そしてこの中佐に任命された翌年、一八六七年に「大君の弟君 皇弟殿下」すなわち徳川昭武の教育係に任じられたのである。ヴィレットは一八六四年から陸軍大臣ニールの幕僚を務めており、その資質が評価されて推薦に至ったと考えられる。⁽²²⁾ これがレオポルド・ヴィレットと徳川昭武の最初の出会いとなった。

ヴィレットは、昭武が翌年の一八六八年に帰国の途につき、教育係の任務を終えると、軍務に復帰し、一八七一年には大佐に任じられた。一八七四年四月からは第五軍団参謀本部長としてオルレアンに派遣されている。このオルレアン駐屯時に、昭武が第二次フランス留学を果たし、二人は再会した。なお、ヴィレットの軍歴には、第二次留学期間に、昭武に関わる任務の記録は無い。前述のとおり、昭武の日記によると、ヴィレットは「エコール・



写真3 レオポルド・ヴィレット
(師団長、1885年頃、個人所蔵)

モンジュ」への入学手続きをとっているが、昭武に直接の勉学指導をした形跡は見られない。ただし、ヴィレットがパリへ行く際に昭武に個人的に連絡を取っていたことは確かである。一八七八年二月三十一日付のヴィレットの書簡は、パリで留学中の昭武宛に書かれたものであり、ヴィレットがパリへ行く予定がある旨を昭武に伝えている。このヴィレットの手紙が、確認される一通目の書簡である。そして次の書簡は一八八一年一月一日付のものであり、第二次留学から日本に帰国した昭武宛にヴィレットが送ったものである。こうして二人の文通が本格的に再開されることとなった。

その後のヴィレットの経歴を確認すると、ヴィレットは一八八三年に師団長に昇進し、一八八六年にはレジヨン・ドヌール二等勲章が授けられた。当時のフランス陸軍において、名誉職であったマレシャルを除けば、師団長は最も高い地位にあり、レジヨン・ドヌール二等勲章は限られた將軍にのみ授けられる栄誉であつた。そして一八八七年二月、ヴィレットは六五歳の定年に達し、退役した。退役後は、夫人とともにヴェルサイユに定住し、ヴェルサイユ陸海軍退役将官兄弟会に入つた。一八九三年からはその会長として運営に携わっている。一九〇七年一月一二日、ヴィレットは発作を起こし、八四年の人生の幕を閉じた。このヴィレットの死去は「軍人の鑑、ヴェルサイユの鑑の死」としてヴェルサイユの地元紙の一面で報じられた。

ヴィレット書簡

ヴィレットが昭武に宛てた書簡は、前述のとおり、昭武の第二次留学中の一八七八年二月三十一日の書簡から始まり、ヴィレットが亡くなる前年の一九〇六年九月一七日付の書簡まで、およそ三〇年にわたつた。その数は全一〇五通におよび、昭武宛の「外国人差し出し」の書簡としては最も分量が多い。これに対して、昭武も逐一返信をヴィレットに宛てて送っていたことは確実であ

るものの、現在確認される書簡は、残念ながら、ヴィレットの計報を受け、ヴィレット夫人に宛てた昭武のお悔やみ状のみである。⁽²⁵⁾

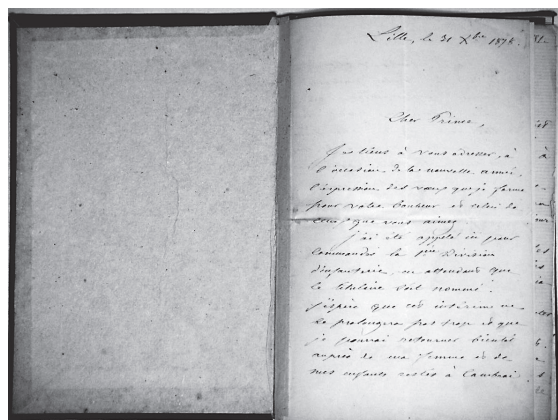
ヴィレット書簡の話題は多方面にわたっているが、全体を通じて特徴的な主題は、第一に、ヴィレット自身の家族に関する頻繁な言及、昭武とその家族全体へ向けられた深い愛情である。ヴィレットは、現役時代はそれぞれの派遣先から書簡を送り、自らの軍務について必ず言及している。また軍人としての道を進んだ息子マックス・アンドレについても、逐一報告した。他方、昭武自身も家族について、ヴィレットに報告していたことは明らかである。ヴィレット書簡では、昭武の結婚、妻盛子（一八六二—一八八三）の死、娘昭子（一八八三—一九七六）、甥の徳川篤敬、また兄で最後の將軍であった徳川慶喜との兄弟間の交流など、明治期の水戸徳川家の動向に触れられている。

これらのヴィレット書簡からあらわれるのは、一八六七年の遣欧使節にかかわる日本側の記録とは全く異なる人物像である。たとえば一八六七年パリ万博に随行した洪沢栄一の談話によると、ヴィレットは「名譽あるしかも短気な人で、我が言は天下の至言と云う様な顔してナポレオンをかさに着て、さすが民部様へ失礼はなかったものの、御附き人の私たちは頗る使ひ廻して、わるく云えば奴隷あつかいだから、常々小面憎くってならなかった」と

ある。⁽²⁶⁾ また同じく随行し、昭武傳役を務めた山高信離とは「極不和にて日々議論不絶、所謂始終いぢり合又は愚弄致候」とさまたまな軋轢があつたこと、またそうしたなかで「公子もコロネルを御疎略被為在候」と、昭武自身もヴィレットと距離を置くようになっていた時期があつたことが伝えられている。⁽²⁷⁾ しかし本書簡を通じて浮かび上がるヴィレット像は、昭武に対する親愛の情にあふれた姿であり、

また両者が互いに一八六七年以来、親交関係を築いていた様子がうかがえるのである。

第二に、一九世紀末から二〇世紀初頭にかけての両国の主要な出来事はほとんど全て書簡のなかで話題となっている。フランスにおいては、



ヴィレット書簡（1878年12月31日付、松戸市戸定歴史館所蔵）

清仏戦争、ドレフュス事件、露仏同盟、日本においては帝国憲法発布、帝国議会、日清戦争、日露戦争など、他の国際情勢も含めて取り上げられている。またフランス軍事顧問団の軍人たちと面識を持った際には昭武に報告し、それらの軍人の動向を伝えている。

第三に、これらの書簡はバリ万博を通じて日仏間の人々の交流状況も証言している。一九〇〇年バリ万博をきっかけに、ヴィレットは平山成信（一八五四—一九二九）⁽²⁸⁾と交際を始め、一九〇二年には渋沢栄一がヴィレットを一八六七年以来、三五年ぶりに再訪問した。このように昭武とヴィレットの二者間に限らず、さまざまな交流が展開されていた。平山成信は一八七八年・一九〇〇年パリ万博に事務官として携わっていたが、一九〇〇年パリ万博の際には、昭武から預かった娘昭子の手作りの品をヴィレットに渡し、その後もヴィレットの家を訪問して交際を重ねた。⁽²⁹⁾また渋沢栄一の一九〇二年の欧米旅行では、渋沢がヴェルサイユに住むヴィレット宅を訪ねているが、この両者の再会の機縁となったのは昭武であったと推測される。このヴェルサイユ訪問については、渋沢の『欧米紀行』で触れられているが、訪問を受けたヴィレットは「共に過ごしたあまりに短い日々のお話し、どれほど嬉しく感じたことか、いくら申し上げてもきりがありません！」

と喜びを表している。⁽³⁰⁾ 渋沢は昭武から預かった「お手紙、美しいお茶の入った小箱、磁器で出来た素晴らしいお皿」をヴィレットに渡したことも書簡から新たに確認される。⁽³¹⁾ このように両者の間には平山や渋沢といった周りの友人たちを含めた交流が行われ、日仏間の人的ネットワークの具体的な様相を読み取ることができるのである。

（2）シャルル・アントワーヌ・マルクリ マルクリの経歴

シャルル・アントワーヌ・マルクリ (Charles Antoine Marquie, 1824-1894) は、明治政府の要請を受けて、一八七二年三月に第二次フランス軍事顧問団の団長として来日し、日本の近代陸軍の創設に尽力したフランス軍人である。しかし落馬から重傷を負い、契約半ばの一八七三年一月に団長職を辞し、わずか一年半あまりの日本滞在でフランスに帰国することとなる。こうした理由から、日本陸軍の創設史や日仏交流史の研究において、その名が必ず挙げられるものの、その後継となったミュニエ中佐を中心とする軍事顧問団の功績に関心が寄せられ、マルクリ自身の経歴についてはほとんど明らかにされてこなかった。⁽³²⁾ 以下にその経歴と昭武との接点を見ていこう。

シャルル・アントワーヌ・マルクリは、一八二四年一月二六日にフランスのバリ（第四区）で生まれた。マルクリは、ヴィレットと同様に高等軍人としての道を歩み、サン・シール士官学校、参謀学校を卒業し、少尉（一八四六年）、中尉（一八四八年）、大尉（一八五二年）と順調に昇進を遂げていく。また一八六九年一〇月から、参謀学校の教師として、優秀な将官の養成に携わった。この参謀学校での教育経験は、一八七二年に第二次軍事顧問団の団長に抜擢されるきっかけとなったと考えられる。

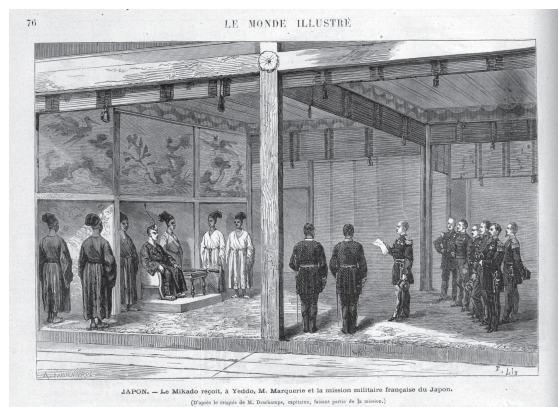
日本の近代陸軍の創設には、幕末から明治にかけて来日したフランス軍事顧問団が大きな役割を果たした。⁽³³⁾ 第一次軍事顧問団は、幕府の依頼によってシャルル・シュルピス・ジュール・シャノワヌ（Charles Sulpice Jules Chanoine 1835-1915）を団長に、幕末の一八六七年一月に来日した。第一次軍事顧問団は、幕府が設置した三兵士官学校（歩兵・騎兵・砲兵）における教育を担った。

幕府による軍事体制の近代化と増強に向けた取り組みは、軍事的集権化を目指す明治の新政府にとつてもやはり重大な懸案であった。一八七〇年一〇月、明治政府は「陸軍はフランス式、海軍はイギリス式」と布告し、幕府のときと同様に、陸軍はフランス式兵制で統制することを決定したのである。こうして明治政府

は、フランス政府との交渉を開始するが、第二次軍事顧問団が日本に到着するのは普仏戦争の敗戦処理が一段落した一八七二年五月であった。

一八七二年五月に、マルクリをはじめ、第二次軍事顧問団一六名が横浜に到着した。また同年一〇月には、教師首長としてマルクリは、明治天皇の謁見を受けている。マルクリはこの謁見において明治天皇に「教師一同軍制及び教練等に勢力を致さんことを奉答」した。⁽³⁴⁾

以降、マルクリは日本の陸軍体制の整備を次々に進めていくこととなる。翌一八七三年にフランス軍事視察官がまとめたマルクリに対する



図版 明治天皇に謁見するマルクリ中佐
(Le Monde illustré, le 1^{er} février 1873)

評価レポートを見ると、マルクリが果たした役割として「士官学校での教育、砲兵工廠、工兵工廠の設置、徴兵の発令、沿岸警備の立案」が挙げられている⁽³⁵⁾。これらは、「フランス軍事顧問団は今日、我々の政府〔フランス〕が日本およびアジアにおよぼし得る最も大きな影響力を持つている」といった評価を得るような高い功績であった⁽³⁶⁾。

このように高い実績を積み重ねた矢先の一八七三年一月に、マルクリは馬から落ちて腸を傷め、フランスに帰国を余儀なくされる。日本から帰国したマルクリは、一八七四年六月に軍務に一度復帰するものの、その三ヶ月後の一八七四年九月には退役する結果となった⁽³⁷⁾。

こうしてマルクリは五一歳の若さで軍人としての現役生活にピリオドを打つこととなった。マルクリにとって、第二次軍事顧問団の団長としての任務が、現役最後の荣誉ある功績として位置づけることができるだろう。なお、日本陸軍省の外国人叙勲者としては、マルクリが最も早く叙勲を受け、一八七七年に勲三等旭日中綬章の叙勲を受けている。またさらにマルクリの死後一〇年以上経った一九一〇年には勲二等瑞宝章を叙勲されている。これらは、マルクリが日本陸軍の創設と近代化に果たした功績を、明治政府も高く評価したことを示すものと言えるだろう。

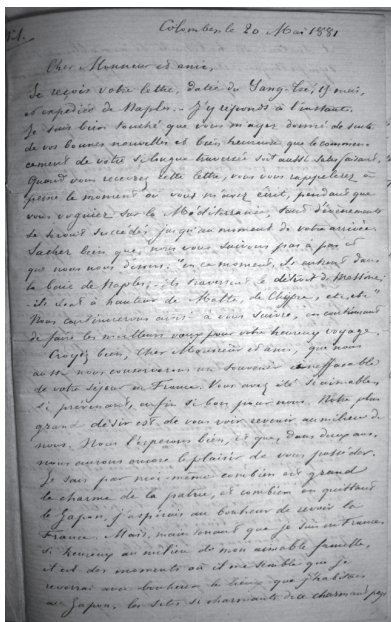
昭武との接点

退役後のマルクリは、明治政府による叙勲とその記録を除いて、日仏のいずれの公的資料からも姿を消す。しかし本稿の冒頭で触れたように、徳川昭武宛のマルクリの書簡から、マルクリが退役後も日本との関係を持続させていたことが判明する。ここに私的書簡の意義のひとつが見出されるであろう。

マルクリは、昭武とどのような機会に出会い、いかなる内容の書簡が両者の間で交わされたのであろうか。昭武は、上述したように一八七四年九月に陸軍少尉となり、陸軍兵学寮戸山学校付を務めた。このときに昭武は、第二次軍事顧問団として来日したフランス将校たちと交際する機会をもった。ただしマルクリは前述のとおり一八七三年一月には軍事顧問団の団長を辞していたため、両者が日本で出会った可能性は低い。マルクリの書簡においても、この点は触れられていない。他方、一八八二年一月一日付の書簡でマルクリは「貴殿〔昭武〕が朝から晩まで粘り強く勉強に励まれたこと」を思い起こしているが、この記述から昭武とマルクリの出会い、昭武の第二次留学を起点とするものであったと推測される⁽³⁸⁾。すなわち第二次留学時に、昭武に直接の勉強を指導したのは、マルクリだったのである⁽³⁹⁾。

マルクリの書簡

次にマルクリ書簡の内容について確認することとしよう。書簡の主要なテーマは、まずフランスおよび日本の政治・軍事情勢である。マルクリは、第一通目の一八八一年五月二〇日付の書簡から、フランスによるチュニジア侵攻について言及し、日本についても清との関係の險悪化について触れている。この後の書簡においても、フランス国内情勢ではガンベッタ内閣の成立から崩壊にいたる過程、またフランスによるチュニジアおよびアルジェリアの植民地化などを取り上げている。一方、日本の情勢については、



マルクリ書簡

(1881年5月20日付、松戸市戸定歴史館所蔵)

日清関係のみならず、一八九〇年の帝国議会の開催等について触れている。これは、単なる書簡上の話題というよりも、マルクリがフランスおよびヨーロッパの情勢をまとめ、報告するよう昭武から依頼を受けていたためであったように思われる。実際、マルクリは『ル・タン (Le Temps)』紙をはじめ、フランスの新聞を昭武に定期的に送って、ヨーロッパ情勢を伝えていた。またマルクリは日本の情勢に対しても、積極的に意見を述べている。たとえば險悪化する日清関係については憂慮し、むしろ両国が協力してロシアに立ち向かうべきであると述べている。また一八九〇年の帝国議会の開催については、これを時期尚早とみなし、ヨーロッパの議会制度を慎重に導入すべきであると言及している。

しかしマルクリ書簡において最も注目すべき点は、パリの日本公使館の動静が頻繁に伝えられている点であろう。マルクリ書簡からは、マルクリが昭武のみならず、甥の篤敬の勉学を指導していたことが読み取れるが、マルクリはこの篤敬とともにたびたびパリの日本公使館を訪れていたのである。当時の日本公使館の日本人の名も頻繁に挙げられており、鮫島尚信の後任となった井田譲（一八三八―一八八九）をはじめ、平山成信といった公使館の人々の名前も挙げられている。さらに一八八一年二月一日付の書簡では、第一次フランス軍事顧問団の団長シャノワース、ブリュネ、

ジュールダン、第二次軍事顧問団でマルクリの後任となったミュニエらとともに、マルクリが日本公使館の招待を受けて集っていたこともうかがい知ることができる。以上のように、パリの日本公使館を中心に、軍事顧問団として来日経験を持つ軍人たちは、フランスに帰国した後も日本との交流を継続していたことがマルクリとの書簡から浮かび上がってくるのである。

(3) ボワソナード家

ボワソナード家の経歴

フランスの法学者ギユスターヴ・ボワソナードは、一八七三年に明治政府から招聘され、司法省法学校で教授した。一八八九年の一時帰国を除き、一八九五年まで約二二年間にわたって日本に滞在し、治刑法・刑法案、民法案の起草などに携わった。このようにボワソナードが日本の法律整備に果たした功績は、これまで数多く論じられてきたが、他方でその家族についてはほとんど論じられていない⁽¹⁰⁾。あるいは論じられていたとしても、誤解があったように思われる。たとえば大久保は、「結婚生活は、ジュリイの性格が派手であったためかうまくゆかなかったと言われている。そのためもあってか、ボワソナードが日本に招聘された時も、夫人はパリに留まり動かなかった。彼とともに来朝して身の回りの

世話一切を取りしきり、主婦的役割を果たしたのは娘のルイズ・アンリエットであった」と述べている⁽¹¹⁾。しかし、昭武宛のボワソナード家の書簡を通じて浮かび上がってくるのは、夫人がパリの日本公使館の日本人と面識を持ち、昭武とは家族ぐるみで交際していたこと、また夫人は少なくとも一度は来日（一八八二年一月）しており、その時に娘ルイズを同行させたことである。しかし「体調不良のため」、夫人は、娘に日本での夫の世話を委ねて帰国した。昭武宛のボワソナード家の書簡から、昭武とボワソナード家の人々がどのようにして出会ったのかをもう少し細かく考察することしよう。

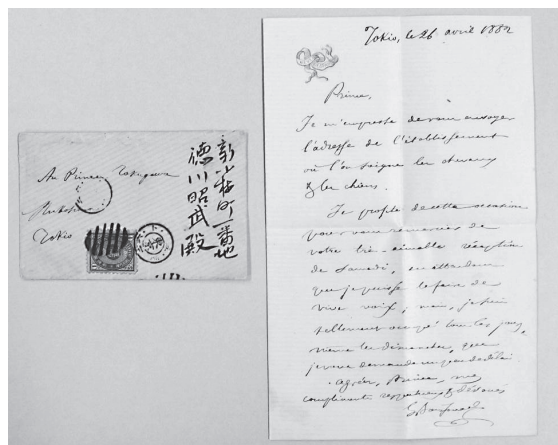
ボワソナード家の書簡

まずギユスターヴ・ボワソナードの書簡は、計三通確認されている⁽¹²⁾。これらは、いずれも短い文面ではあるが、ボワソナードと昭武が互いの家を行き来するなどして交友関係を深めていたことを証言している。第一通目は、一八八一年八月七日付で、ボワソナードは「平山様から、貴殿〔昭武〕が拙宅を一〇日の水曜日に訪問し、内輪での昼食会に参加して下さることを伺い、嬉しく存じます」と述べている。このように、まずはボワソナードが昭武を昼食に招待し、これが両者の最初の出会いとなったと推測され

る。これに対して昭武も、ボワソナードを自邸に招いている。第二通目は、一八八二年四月二〇日付のものであり、ボワソナードが、昭武から招待を受けた昼食会に出席する旨を伝えたものである。三通目は、一八八二年四月二六日付の書簡であり、二通目で招待を受けた昼食会への礼状であった。

さて、この第一通目の文面から確認できるように、昭武とボワソナードを仲介したのは平山成信であった。この書簡では文面上、平山の名しか挙げられていないが、さらにもうひとり、ボワソナード夫人が重要な接点となっていたことは無視できない。ボワソナード夫人の第一通目は、一八八一年六月二四日付の書簡である。これは第二次留学から帰国する昭武に宛てた書簡であった。この書簡には、最初から平山成信の名前が出てきており、ヴィレットやマルクリと同様に、昭武の日仏ネットワークのなかにボワソナード家もいたことが推察される。また同書簡で、夫人は「私どもは一緒に過ごしていた楽しい日々を決して忘れません（中略）子供たちも、親愛なる貴殿へよろしくと申しており、心からの友情を送ります」と述べている。ここから読み取れるように昭武は第二次留学時にボワソナード夫人と面識を持ち、既に家族ぐるみの交際をしていたのである。上述の二人の子供とは、娘ルイズ・アンリエットと、息子ポール・ルイ・アンリ (Paul

Louis Henri, 1853-1920) である。また、「ボワソナードの邸宅をご称賛くださいますが、夫が私たちに日本に合流するよう勧めていることはご存知でしょう。ただその決断には大変な困難が伴います。私はそれほど丈夫ではなく、女性だけの長旅は恐ろしく思えます。またアンリは、ここ「パリ」に一人で残るには良好な健康状態にありません⁽⁴⁾」と述べられているが、ここからはギユスターヴ・ボワソナードの單身赴任の理由も浮かび上がってくる。つまりボワソナードの家族が日本行きを見送っていたのは、ボワソナード夫人と息子アンリの健康が優れないことが主な



ギユスターヴ・ボワソナード書簡
(1882年4月26日付、松戸市戸定歴史館所蔵)

理由だったのである。

さらにボワソナード夫人は、昭武に日本にいる夫と面識を持つよう強く勧めている。「私たちと同様に、夫とおつきあいくだされば大変嬉しく存じます。夫は、貴殿とお目にかかることができれば大変喜ぶでしょうし、夫は私たちがとても良いおつきあいをさせていただいたことを知っております。夫にとって、祖国とその家族について話す機会となり大変嬉しいことでしょう。また夫は、私たちと同じく、貴殿が夫を訪問し、友人のなかに入れてくださったなら大変光栄に思うことでしょう」⁽⁴⁵⁾。昭武とギュスターヴ・ボワソナードが交友関係を築いていたことは、前述のとおりであるが、そこにはボワソナード夫人の意向も働いていたのである。ところでこの二人の関係についてとりわけ重要なのは、彼らが、一八八六年五月に東京で創立された「仏学会」の名誉会員として、継続的に交際関係を保持していくことである。この仏学会の創立を計画した主要メンバーには、平山成信と、司法省の栗塚省吾（一八五三—一九二〇）⁽⁴⁶⁾の名前が見える。⁽⁴⁷⁾そして興味深いことに、平山と栗塚はいずれも一八七〇年代・八〇年代にパリに滞在していたのだが、その時代、両者ともにボワソナード夫人と面識を持っていたことが、夫人の書簡からうかがい知ることができるのである。

父とともに東京に残った娘ルイズの書簡は、一通確認されており、一八八四年一〇月三日付のものである。この書簡でルイズは、母のアンリエットから預かった昭武宛の手紙を同封した旨を記している。また昭武と篤敬から届いた葉書に対する返礼を記している。このように娘のルイズは東京で、昭武や篤敬との交際を継続し、父ボワソナードの仕事を支えたのである。

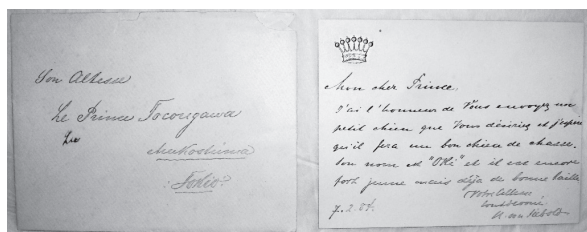
（4）ハインリッヒ・フォン・シーボルト ハインリッヒの経歴

昭武とハインリッヒ・フォン・シーボルトの出会い、兄アレクサンダーが接点となっている。前述したように、そもそも昭武とアレクサンダーの出会い、一八六七年であった。そのとき昭武一行の横浜からパリまでの道中、またヨーロッパ諸国の巡歴の際も、通訳としてアレクサンダーは同行していた。一八六七年一二月にヨーロッパ諸国の巡歴を終えると、アレクサンダーは一行のもとを去っている。ただし翌一八六八年一月一七日付で、アレクサンダー宛に昭武が送った手紙がシーボルト家の所蔵資料のなかに確認できる。ここで昭武は、「私のもとを去ってから、どのようにお過ごしですか。私の写真をお送りします。その写真で、リオン〔昭武がパリで飼った犬の名前〕が元気でいることがお分

ハインリッヒの書簡

徳川昭武に宛てたハインリッヒ・フォン・シーボルトの書簡は、

の来日後、駐日オーストリアハンガリー帝国公使館に外交官として勤務することとなる。



ハインリッヒ・フォン・シーボルト書簡
(1884年2月7日付、松戸市戸定歴史館所蔵)

かりになるでしょう」と述べている。このように、一八六八年以降も、昭武とアレクサンダーの間では何らかの交流が継続されたと考えられる。

一八六九年、アレクサンダーは、弟のハインリッヒをともなうて再び来日した。その際にアレクサンダーを通じて、昭武はハインリッヒと出会い、この弟との交際が始まったと考えられる。⁽⁴⁹⁾ ほぼ同年

のハインリッヒと昭武は、互いの家を頻繁に行き来するなど、親しく交際していったようである。なお、ハインリッヒは、一八六九年

全六通確認できる。⁽⁴⁹⁾ 幸いにも、ハインリッヒに宛てた昭武の書簡

についても、シーボルト家の所蔵資料のなかで確認することができる。⁽⁵⁰⁾ ハインリッヒの書簡について注目すべきは、政治や外交などの公的な事柄ではなく、私的な友人関係として会話を交わす二人の姿である。その書簡は、主として次に会う日時の伝達といったフランクな内容で短い文章が多いのだが、とりわけ二人の共通の趣味であった狩猟にかかわる話題が頻出している。実のところ、狩猟は、ヴィレットやマルクリの書簡においても何度も触れられるテーマであるが、当時の社交界における共通の話題の一つであったのだ。

おわりに

本稿では、松戸徳川家に所蔵される徳川昭武宛のフランス語書簡を題材にし、その差し出し人や書簡の内容を整理しつつ、明治期にいかなる日仏の人的ネットワークが展開されたのかを分析してきた。一般的に、幕末から明治期にかけて軍事、法学、外交の分野で発展した日仏交流は、それぞれ一八八〇年代に入ると次第に衰退傾向を見せるとされる。軍事では、日本陸軍がフランス式からドイツ式に切り替えられていく。また法学でも同様に、フラ

ンス法からドイツ法へと転換されていくのである。こうした日本におけるフランスの影響力の後退はその後も継続し、改善の兆しは、外交上では一九〇七年の日仏協約の締結を待たねばならない。しかし、そうした公的関係の衰退とは裏腹に、私的な書簡のやりとりからは、公文書では語られてこなかったものがさまざまなに浮かび上がってくる。例えば、昭武宛のフランス語書簡では、「家族」が話題となっているが、こうした記述から明治期の水戸徳川家の推移、ヴィレットやボワソナードの家族関係などにとどまらず、当時のフランス軍人や学者の生活様式などが垣間見られる。また、そればかりでなく、これらの昭武宛のフランス語書簡から判明するのは、幕末から明治にかけて脈々と継続された日仏の人的ネットワークの実態である。幕末・明治期に來日経験を持つフランス軍事顧問団の軍人たちは、パリの日本公使館に集會し、日本との接点を継続的に持っていた。またそのネットワークのなかには、パリの日本公使館の職員や日本人留學生の名前が挙げられる。とりわけ平山成信は、ヴィレット、マルクリ、ボワソナードのいずれの書簡においてもその名が挙げられ、昭武の日仏ネットワークをつなぐ重要人物であったことが分かる。また法學者ボワソナードについても、徳川昭武のみならず、平山成信、栗塚省吾らとの家族ぐるみの交際に端を発し、その後は日本で公的な日仏

交流組織を設立することとなる。彼らはともに、一八八六年の仏学会を支える主要メンバーとして、日本におけるフランス語およびフランス法学の發展に寄与した。なお、この仏学会は、一九〇九年に日仏協會に改名し、一九二四年にはその後の日仏の學術交流の場として現在に続く日仏會館の設立につながっていく。徳川昭武は、こうした日仏間の人的ネットワークのなかに身を置き、そのひとつの結節点をなしたのであり、フランスとの接点を生涯持ち続けた人物だったのである。本稿は、昭武宛のフランス語書簡に焦点を絞ってこうした日仏ネットワークの形成について論じてきたが、今後、平山成信、洪沢榮一など、明治期にフランスと交流を重ねていった主要人物に着目し、彼らの書簡を合わせて分析することで、日仏の人的ネットワークをいっそう重層的に明らかにすることができるだろう。

註

- (1) 徳川昭武に関する主な研究は以下のとおり。高橋邦太郎『花のバリへ少年使節——慶応三年パリ万国博覧會記』三修社、一九七九年、須見裕『徳川昭武——万博殿様一代記』中央公論社、一九八四年、松戸市戸定歴史館編『文明開化のあけぼのを見た男たち——慶応三年遣仏使節団の明治』松戸市戸定歴史館、一九九三年、宮地正人監修『徳川昭武幕末滞欧日記』松戸市戸定歴史館、一九九七年、宮永孝『プリンス昭武の欧州紀行——慶応三年パリ万博

使節』山川出版社、二〇〇〇年。

(2) 松戸市教育委員会編『松戸徳川家資料目録』第一集、一九八九年、四五～六二頁(松戸市戸定歴史館所蔵、角山元保「徳川昭武公関係仏文資料をよんで」『戸定論叢』第1号、松戸市教育委員会、一九九〇年、一五～三〇頁)。

(3) 初期日仏交流については以下を参照。西堀昭「日仏文化交流史の研究——日本の近代化とフランス人」増訂版、駿河台出版社、一九八八年、澤護「御雇いフランス人の研究」敬愛大学経済文化研究所、一九九一年、西野嘉章・クリスティアン・ボラック編『維新とフランス——日仏学術交流の黎明』東京大学総合研究博物館、二〇〇九年、リチャード・シムズ著、矢田部厚彦訳『幕末・明治日仏関係史——一八五四～一八九五年』ミネルヴァ書房、二〇一〇年。

(4) 明治期の日仏交流において「書簡」に注目した研究では、以下を挙げることができる。鯨島文書研究会編『鯨島尚信在欧外交書簡録』思文閣出版、二〇〇二年、Institut de Tokyo, Institution administrative indépendante, Centre national de recherche pour les propriétés culturelles, *Correspondance adressée à Hayashi Tadamasu, Kokushokankōkai*, 2001、木々康子編、高頭麻子訳『林忠正林忠正宛書簡・資料集』信山社出版、二〇〇三年。

(5) 徳川昭武とフランスの接点については、とりわけヴィレットとの交流に焦点を当て、次の文献の「解題」でまとめた。寺本敬子『徳川昭武に宛てたレオポルド・ヴィレットの書簡——一八六七年パリ万博の出会いから日露戦争まで』上巻、一橋大学社会科学古典資料センター、二〇〇九年。細部については同書を参照された。

(6) Minamoto Keiki, Le Taicoun du Japon à l'Empereur, Napoléon, dans la correspondance de Léon Roches au Marquis de Mousnier, Ministre des Affaires Étrangères, Yokohama le 14 février 1867, Archives du Ministère des Affaires Étrangères, Correspondance Politique Japon 1867.

(7) 洪沢栄一『欧米紀行』ゆまに書房、一九八九年(初版一九〇三年)、洪沢青淵記念財団竜門社編『洪沢栄一伝記資料』第三六巻、洪沢栄一伝記資料刊行会、一九六一年、洪沢栄一記念財団洪沢史料館『洪沢栄一とアルペール・カーン——日仏実業家交流の軌跡』二〇一〇年。

(8) Inouye Kawachi no Kami and other 3 Ministers to Parkes, Feb. 10, 1867, in Despatches from H. S. Parkes to Foreign Office, No. 20, Feb. 13, 1867, Public Record Office London「遣佛使節とシーボルト同船の件英國公使へ通牒」慶応三年正月六日、日本史籍協会編『徳川昭武滞欧記録』第一巻、東京大学出版会、一九七三年、七一頁。

(9) 「徳川昭武日記」、宮地正人監修、前掲書、一九頁。

(10) 同右、六〇頁、八〇頁。

(11) 角山元保「徳川昭武の仏文日記」、宮地正人監修、前掲書、二二二～二二八頁。徳川昭武仏文滞仏日記」の原文(フランス語)とその翻訳(日本語)については、同書八五～九九頁および巻末付録二〇～三〇頁を参照。

(12) 「徳川昭武仏文滞航日記」、宮地正人監修、前掲書、一〇一頁。

(13) 同右、一〇二頁。

(14) 須見裕、前掲書、一八二頁。

(15) 第二次留学については、同右、一九〇～二〇七頁を参照。

(16) 現在の「リセ・カルノ(Lycée Carnot)」の前身にあたる。

(17) アレクサンダー宛の昭武の書簡(一八八〇年九月三日付、パリ)では、ベルリンでの歓待に礼が述べられている。この書簡は次の史料集に収載されている。Vera Schmidt ed., *Korrespondenz Alexander von Siebolds : in den Archiven des japanischen Außenministeriums und der Tokyo-Universität, 1859-1895, Acta Sieboldiana*, T. 9, Harrassowitz, 2000, lettre no. 4.0200, p. 333-334.

(18) 徳川昭武「洋行日記」、松戸市教育委員会、前掲書、八頁(松戸市戸定歴

- 史館所蔵。「洋行日記」の翻刻は、松戸市戸定歴史館の研究員の小寺瑛広氏からご教示いただいた。記して感謝の意を表します。なお、明治初期にフランスに留学した日本人については下記の文献を参照。田中貞夫『幕末明治初期—仏蘭西学の研究—改訂版、国書刊行会、二〇一四年。
- (19) 現在のムシー・シュル・ヴェルヌイユ (Mussy-sur-Vernoy) 市。
- (20) ヴィレットの軍歴については、寺本敬子『徳川昭武に宛てたレオポルド・ヴィレットの書簡』上巻、前掲書「解題」を参照。
- (21) ヴィレットの軍歴表、フランス陸軍の階級表は、同右、下巻、二六〇～二六七頁を参照。
- (22) 浪沢栄一の記録にも、ヴィレットが「其時の有力なる陸軍大臣の大層轟員の軍人であるとかいふことでありました」とある(浪沢青淵記念財団竜門社編、前掲書、第一巻、六〇四頁)。
- (23) 寺本敬子『徳川昭武に宛てたレオポルド・ヴィレットの書簡』上巻、前掲書、二九頁(日本語訳八五頁)。
- (24) 同右、二九～三一頁(日本語訳八五～八七頁)。
- (25) 同右、下巻、二〇三頁(日本語訳二五九頁)。
- (26) 浪沢青淵記念財団竜門社編、前掲書、第一巻、六〇七～六〇八頁。
- (27) 大塚武松編『川勝家文書』日本史籍協会、一九三〇年、三〇頁(在佛栗本安芸守書簡「川勝近江守等宛」慶応三年一月二三日)。
- (28) 平山成信は明治・大正の官僚、政治家。一八七一年ウィーン万博、一八七八年・一九〇〇年パリ万博に事務官として携わる。一八七八年～一八八一年は、外務二等書記生として在パリ日本公使館在勤。一九〇〇年四月～一〇月に、一九〇〇年パリ万博の評議員としてフランスに出張した。
- (29) 寺本敬子『徳川昭武に宛てたレオポルド・ヴィレットの書簡』下巻、前掲書、一五九～一六〇頁(日本語訳二二四～二二五頁)。
- (30) 浪沢栄一『欧米紀行』前掲書、三四〇～三四二頁。
- (31) 寺本敬子『徳川昭武に宛てたレオポルド・ヴィレットの書簡』下巻、前掲書、一七六～一七七頁(日本語訳二三八頁)。
- (32) 詳細は、寺本敬子『シャルル・アントワーヌ・マルクリーと日本』『仏蘭西学研究』第三九号、日本仏学史学会、二〇一三年、四一～五二頁を参照。フランス軍事顧問団の先行研究としては、主に次の研究が挙げられる。篠原宏『陸軍創設史—フランス軍事顧問団の影—リプロボート、一九八三年、Shinichi Ichikawa "Les premières missions militaires françaises, vues par les Japonais de l'époque de Meiji", *Revue Historique des Armées*, no. 3, Service Historique de l'Armée de Terre, 2001, p. 55-64" コレージュ・ド・フランス日本学高等研究所・フランス国立科学研究所センター日本文明研究所監修『フランス士官が見た近代日本のあけぼの』IRD、二〇〇五年、西堀昭『日本の近代化とクランド・ゼコール—黎明期の日仏交流』拓植書房新社、二〇〇八年、西野嘉章・クリスチャン・ボラック編、前掲書、竹本知行『幕末・維新の西洋兵学と近代軍制—大村益次郎とその継承者』思文閣出版、二〇一四年。
- (33) 篠山宏、前掲書、保谷徹「クレットマンとフランス軍事顧問団」コレージュ・ド・フランス編、前掲書、一九八～二〇六頁。
- (34) 宮内庁編『明治天皇紀』第二巻、吉川弘文館、一九六八年、七六二～七六三頁。
- (35) "Attachés militaires et Officiers en mission à l'étranger, Inspection générale de 1873, Mission du Japon, Marquerie, novembre 1873, in "Charles Antoine Marquerie", cité : 4YF9714, Service Historique de la Défense.
- (36) *Ibid.*
- (37) "Rapport fait au Ministre, Paris le 3 septembre 1874", in "Charles Antoine Marquerie" *op. cit.*
- (38) Lettre de C. A. Marquerie à Akitake Tokugawa, le 1^{er} janvier 1822 (34

戸市戸定歴史館所蔵)

- (39) 角山、前掲論文を参照。
- (40) ギュスターヴ・ボワソナードの家族関係について言及された数少ない研究として以下がある。大久保泰甫『ボアソナードと三つの墓』上下、『創文』一〇六号(一九七二年三月、一〇一―一三頁)、『一〇七号(一九七二年四月、一四―一七頁)、大久保泰甫『ボワソナード——日本近代法の父』岩波書店、一九七七年、西堀昭『日仏文化交流史の研究』、前掲書、二七―八〇頁。
- (41) 大久保泰甫『ボアソナードと三つの墓(下)』、『創文』一〇七号、一九七二年四月、一四頁。
- (42) 松戸市教育委員会、前掲書、四五―四六頁(松戸市戸定歴史館所蔵)。
- (43) Julie Henriette Boissonade à Akirake Tokugawa, le 24 juin 1881 (松戸市戸定歴史館所蔵)
- (44) Julie Henriette Boissonade à Akirake Tokugawa, le 26 août 1881 (松戸市戸定歴史館所蔵)
- (45) Julie Henriette Boissonade à Akirake Tokugawa, le 12 octobre 1881 (松戸市戸定歴史館所蔵)
- (46) 栗塚は、一八七五年にフランスへ留学し、パリ大学で法律を研究。一八八一年に帰国し、司法省書記官、刑事局長等を経て、一八九二年大審院部長となる。
- (47) 仏学会については、次の論文を参照。安岡昭男「仏学会に関する基本的研究(一・二)」『法政大学文学部紀要』第四二号(一九九六年、八三―一二頁)、四三号(一九九七年一一―一五頁)。
- (48) Arcadio Schwade ed., *Briefe aus dem Familienarchiv von Brandenstein: der Kreis um Alexander und Heinrich von Siebold*, Acta Sieboldiana, T. 4, Harrassowitz, 1991, lettre no. 3001, p. 29.
- (49) アレクサンダーに宛てた昭武の書簡(一八七四年九月三日付)が、シーボ

ルト家の所蔵資料のなかに確認される。この書簡は全文フランス語で、送り主は「Tokugawa」と書かれ、名が省略されているが、徳川昭武と推察される。本書簡では、ヨーロッパから日本に戻ったアレクサンダーから連絡を受け、アレクサンダーを自邸に招待する旨を伝えている。Arcadio Schwade ed., *op. cit.*, lettre no. 3005, p. 3334.

- (50) 松戸市教育委員会、前掲書、四九―五〇頁(松戸市戸定歴史館所蔵資料)。
- (51) Arcadio Schwade ed., *op. cit.*, lettres no. 3005, 3014, 3015, 3016, 3023, 3025.

附記 本稿において資料の掲載を許可くださった松戸市戸定歴史館ならびに個人所蔵家の方々に、記して感謝の意を表します。